

月刊

みんぱく

● 国立民族学博物館

2010

5
月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成22年5月1日発行 第34巻第5号通巻第392号

特集 ●
古代アンデス
黄金の墓を掘る



産科フィスチュラ問題に関わって

なかやま みちこ
中山 道子

産

科フィスチュラという障がある。難産や、母親が低年齢で産道が未発育の場合、胎児に圧迫されて膣、膀胱、直腸に穴の開くもので、死産を伴うことも多いし、患者は慢性的な大小便の失禁状態になり、その臭気ゆえに離縁されたり社会から疎外されてしまう。手術で九割は直るが、女性が低年齢で結婚する社会ではよく起き、手術費が工面できない貧困層に悲惨な例が多い。

エチオピアのアデイスアベバでは、ノーベル平和賞候補にもなった豪人医師のキャサリン・ハムリン医師と亡夫レジナルド医師が一九五九年からこの問題に携わるようになった。最初は手術法も確立せず試行錯誤が続いたが、一九七四年に悲願だった専門病院を開き、無料で手術や治療を行い、回復後の自立のための

教育や訓練も行ってきた。すでに三万人以上を治療したが、毎年多くの患者が生じて追いつかない。現地医師も少ないので、助産師大学も設立するなど、医療従事者育成も進めている。昨年はキャサリン医師たちの活動五〇年を記念する国際式典も開かれた。

私は、米国滞在中にハムリン医師のインタビュー番組を見てこの障がいを知った。その後、自身、胎盤剥離で大量出血の末に超未熟児出産の経験をした。先端医療を受けられた私に比べ、貧困ゆえに苦しむ多くの女性患者のいる不平等への思いから、専門病院に寄付をした。すると支援団体の立ち上げを依頼されたので、二〇〇五年に日本初のフィスチュラ患者支援団体を立ち上げたのである。以来、皆がボランティアでエチオピアの専門病院へ資金や物資を送る活動を行っ

てきた。現在、ハムリン医師率いるハムリンフィスチュラグループは、エチオピアのアデイスアベバを本部として、世界中に支援の輪を広げており、私たちの団体も、その一員として、「ハムリンフィスチュラジャパン」と名乗っている。

二〇〇三年に国連人口基金（UNFPA）がフィスチュラ撲滅キャンペーンを始めて以来、この障がいは世界的に知られるようになり、特に英語圏では支援活動が広がっている。ところが日本では、障がい自体がまれなので医学界でさえよく知られていない。そこで私たちは、障がいの存在を広報したり、治療費の募金活動を進めている。年配女性を中心に徐々に知られるようになってきたが、アフリカ研究やジェンダー研究分野の方々にも知っていただき、支援の輪を広げたいと願っている。

- 1 エッセイ 世界へ●世界から
産科フィスチュラ問題に関わって
中山 道子
- 2 特集
古代アンデス 黄金の墓を掘る
古代アンデス 黄金墓の発見——ペルー北高地
パコバンバ遺跡プロジェクトより…… 関 雄二
パコバンバ遺跡の景観構造と昂…… 坂井 正人
形成期神殿と動物…… 鶴澤 和宏
パコバンバ村の食事——今・昔…… 瀧上 舞
遺跡調査と現地社会…… 荒田 恵
- 8 モノグラフ
ペットボトル以前の事
小島 摩文
- 10 地球ミュージアム紀行
沖縄県国頭郡「恩納村博物館」
本土復帰後の観光開発を生かした地域文化の継承と発信
久保 正敏
- 11 表紙モノ語り
戦士の頭を象った壺
関 雄二
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 みんぱくを離れるにあたって
フィールドノートを読む
——みんぱくでの三三年
松山 利夫
- 16 多文化をささえる人びと
対話から理解へ
～大学生たちとの横浜中華学院訪問記～
陳 天璽
- 18 生きもの博物誌
ブラジルの国民的な飲み物
〈ガラナ〉
中牧 弘允
- 20 歳時世相編
大甲媽祖遶境進香
夏の到来をつげる台湾の媽祖巡行
野林 厚志
- 22 フィールドで考える
海の恵みは皆で分ける
小野 林太郎
- 24 みんぱくウィークエンドサロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

東京大学法学部卒、ハーバード大学公衆衛生学修士。海外不動産投資コンサルタント業のかたわら、ハムリンフィスチュラジャパン代表を務める。以来、対日アフリカ外交団休例会などで産科フィスチュラ問題の広報を進めている。

ハムリンフィスチュラジャパンのHP <http://www.fistula-japan.org>

古代アンデス 黄金の墓を掘る

みんぱくは、ペルー国立サン・マルコス大学と学術協定を結び、南米アンデス山中にある巨大な神殿遺跡パコパンバ(西暦紀元前二二〇〇年〜前五〇〇年)を発掘調査している。昨年九月、西暦紀元前八〇〇年ごろにさかのぼる黄金製品を副葬した墓が発見され、「アンデスの卑弥呼」として日本でも報道された。今回は、さまざまな自然科学的手法を用いた研究、そして調査過程における地域住民との関係について紹介していきたい



古代アンデス 黄金墓の発見

ペルー北高地パコパンバ遺跡プロジェクトより



パコパンバ遺跡遠景

昨夏、金製品が発見されたパコパンバ遺跡は、南米ペルー北部、海拔二五〇〇メートルの山中に位置する形成期の巨大な神殿遺跡である。ここ五年ほど、科学研究費補助金の支援を受け、みんぱくとペルー国立サン・マルコス大学とで調査を進めている。形成期(西暦紀元前三〇〇〇年〜紀元前後)とは、アンデス文明の母体が形成された時期で、神殿での活動



墓の発掘風景

を通じて地域社会の統合が図られたと考えられる。調査の目的は、国家成立前のこの時代において、社会階層が出現する過程を考古学的に明らかにすることにある。黄金の墓は、まさにこの点を解明するための鍵を握っているといってもよい。

黄金墓の発見

遺跡は三段のテラスからなり、墓が発見されたのは最上段のテラスである。窪んだ広場を囲む三方に、低い建物(基壇)が配置され、正面の中央基壇上には複数の部屋が連なる。部屋の出入り口は一直線上に並び、さらにその延長線は、広場や他



黄金の墓。横臥屈葬で、頭部に朱(硫化水銀)と青色の顔料(藍銅鉱)がかけられていた

の遺構の中心を貫く。墓は、中央基壇の床下、しかも中心軸上という重要な場所にあった。おそらく西暦紀元前八〇〇年ごろ、神殿建築に先立ち、宗教的な力を込める儀礼の一環として墓を設けたのであろう。八月初旬の穴の発見から一カ月あまり慎重に掘り進めた結果、地下一・五メートルで平石群に遭

金製品と女性被葬者

光り輝く金の正体は、直径六センチの金製耳輪一對と、長さ二六センチの金製の板状耳飾り一對であり、アメリカ大陸最古の部類に属する。墓の分析は

これからだ、自然人類学者の長岡朋人さんや鶴沢和宏さんによれば、被葬者は女性で、身長は当時の平均をはるかに上回る



金製耳飾りをとり上げる

墓が見つかった中央基壇



一五五センチもあるという。頭蓋骨には、この遺跡では唯一の変形の跡が認められる。変形は幼児期に人工的に施すことから、生まれながらにして、社会のリーダーとなる

ことが運命づけられた人物であることがわかる。現場説明会や、遺跡の麓の村で展示会も開催した。われわれが盗掘者ではないことを示すだけでなく、文化遺産の活用には地域住民の理解と関与が必要だからである。その意味でも、博物館建設を望む村人の声にどう応えるのか、重い課題を背負うことになった。



金製耳輪(上部)、金製耳飾り(下部)、珪孔雀石の円盤。円盤は口のなかにあった



パコパンバ遺跡の位置

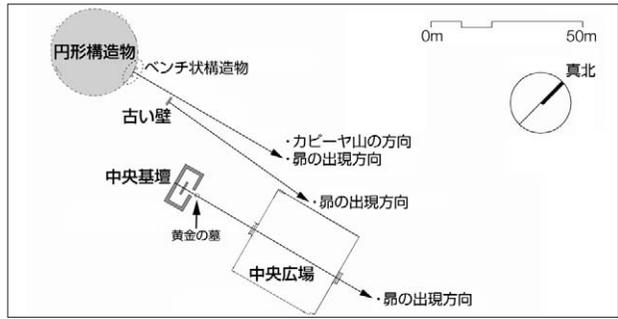


パコパンパ遺跡の景観構造と昴

星はすばる

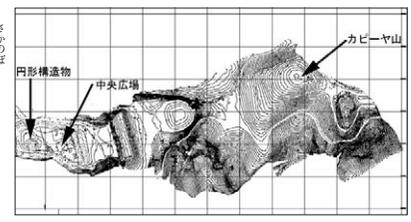
「星はすばる」とは『枕草子』にある有名な一節である。この昴（スバル）は青白く輝く星々が密集した星団であり、別名フレアデス星団ともよばれ、ギリシャ神話をはじめとする世界各地の神話や伝承に登場する。

南米ペルーでは、昴は四月下旬になると天空間から姿を消し、六月になって東の空から再出現する。再び姿を見せた昴を農民たちは観測して、その見え方によって種まきの時期を決め、豊作を占っている。すなわち、昴は農耕活動と密接に結びついた星なのである。こうした天



パコパンパ遺跡の景観構造と昴

体や地形を考古学データと結びつけて解釈する分野は景観考古学とよばれ、これまでの研究によれば、昴の重要性は、先スペイン期の諸社会にま



パコパンパ遺跡と周囲の地形



カビーヤ山の遠景

で遡ることが明らかにされてきた。形成期社会（西暦紀元前三〇〇年〜紀元前後）、チムー王国（二〇世紀〜一五世紀）、そしてインカ帝国（一五世紀〜一五三三）の時代に建設された神殿や王宮の配置プランが、当時観測できた昴の出没方向を基準としているのである。

パコパンパ遺跡の配置プラン

そこで、パコパンパ遺跡を調査するにあたって、この形成期神殿の配置プランに注目したところ、興味深い事実が浮かび上がった。この神殿には円形構造物が建てられ、その正面にベンチのような構造物が設定された。当時この場所に立つと、カビーヤとよばれる東側の山の頂上から、昴が出現するのを観察できた。つまり、ベンチ状構造物は、昴と山を観測するための場所として設定されたことになる。

円形構造物に付随するベンチ状構造物



坂井 正人
さかい まさと
山形大学 教授
一九六三年千葉直正氏。専門は文化人類学・アンデス考古学。無文字社会における建築活動と景観に関心があり、現在、パコパンパ遺跡および世界遺産ナスカの地上絵において現地調査を実施している。

円形構造物の南東には中央基壇があり、その中心軸は当時観測できた昴の出現方向とほぼ一致することが判明した。この方向軸上には、二〇〇九年に発見された黄金の墓もあり、この建物軸の重要性は明らかである。中央基壇の東側には、窪んだ広場も建設されたが、その中心軸も同じ方向である。

さらに興味深いのは、上記の中央基壇やベンチ状構造物よりも古い層から、方向の少しずれた壁が出土したことである。この壁を含む建物全体の配置プランはまだ未調査であるが、少なくともこの壁の方向は、中央基壇よりも数百年前における昴の出現方向と対応する。この古い壁が昴の方向を基準にして設定されたとしても、昴の出現方向は毎年少しずつ変化するので、いずれ昴と建物の方向にずれが生じる。そこで、こうしたずれに対して建て替えがおこなわれ、古い壁が埋められたのであれば、形成期神殿に特徴的な神殿更新の契機として天体の出現方向の変化をあげることができる。

いずれにしても、黄金の墓に埋葬された女性をはじめとする当時の権力者は、農耕の豊穡を祈り、星と結びつけた神殿建設を計画した可能性が高いのである。



形成期神殿と動物

神殿から見つかる動物

古代アンデスの神殿から出土するのは、華麗な金製品や装飾の施された土器ばかりではない。人工物に混ざって大量の動物骨が出土している。しかしなぜ神殿に多量の動物骨が存在するのか、じつは詳しい理由はわかっていない。出土する動物にはシカやクイ（食用に家畜化されたテンジクネズミ）など食料とされた動物のほか、荷運びに使われたリヤマ、儀礼に用いられたのであろうジャガーなど多様な種が含まれている。また、それぞれの出土状況も多様だ。おそらく饗宴や儀式など、さまざまな行動が繰り返し営まれた結果なのだろう。



加工されたジャガーの下アゴ

ところで、神殿から見つかる動物たちは、生息する生態系がかなり異なっている。リヤマなどのラクダ類は高原、シカは山脈のやや低い峡谷、ジャガーはアマゾンの密林をもともの棲みかになっている。パコパンパ遺跡からはクジラの骨まで見つ

から、古代アンデス人は、海岸からアマゾンまで広大な領域にわたり動物を集めていたことがわかる。神殿から出土する動物は、人びとの生活、活動範囲、信仰や世界観の復元に役立つ情報を含んでいる。

ペルー北高地の自然動物相と遺跡動物相

パコパンパ遺跡があるペルー北高地は、南部にくらべ標高が低く温暖で、植生も豊かである（南半球では北は暖かく南は寒い）。北高地でもっとも重要な動物はオジロジカだ。姿、大きさともニホンジカとよく似ており、標高一〇〇〇メートルから二五〇〇メートルの領域を中心に分布している。パコパンパ遺跡に限らず、北高地に居住した先史アンデスの人びとは、オジロジカをおもな狩猟動物として捕獲し主要な動物資源としていたらしい。パコパンパ遺跡と同様に、近傍のクントウル・ウシ遺跡でも本種が出土動物骨の過半数を占めている。

また、北高地の動物相の特徴として、アンデス高地の代表的な動物であるラクダの仲間が生息していないことがあげられる。現在のリヤマ、アルパカは、西暦紀元前四〇〇〇年ころ、アンデス中央高地で野生祖先種のグアナコ、ビクーニヤ



毛が重用されるビクーニヤ（野生ラクダ）

ビクーニヤの群れ



頭部がないラクダ科動物の埋葬



パコパンパ村の食事——今・昔

調査隊の一日はパコパンパ村の村人が運んでくれた朝食から始まる。パンとゆで卵、チーズ、ポテトフライ、ヨーグルト飲料、コーヒー。たっぷりの朝食を食べ、形成期の神殿遺構を掘りに遺跡へ向かう。この朝食のなかに当時の人びとが食べていたものと同じ食物は何があるだろうか。答えはジャガイモのみである。他の食物はすべて植民地時代以降にもたらされた物なのだ。それでは西暦紀元前の北部ペルー山岳地域ではどのようなものを食べていたのだろうか。日本でも出てきそうなメニューの朝食を掘りつつ、当時の人びとの食物へ思いを馳せることから我々の調査は始まる。

古代人の食性推定



南部高地における昔ながらの食物

「そもそも、「古代人が何を食べていたのか。」ということを推定するにはどんな方法があるだろうか。一番確かな方法は文献に記載された食材や料理から調べることである。しかし、アンデス地域の文化では文字



クイ調理前

が発達しなかったため文献記録が存在しない。遺跡から出土する動物骨や植物遺存体も重要な情報源であるが、遺跡の利用に季節性があったり、社会のなかで食生活に大きな差があったりすると遺物の情報を読み解くことは難しい。

そこで、人の骨から直接食べたものを推定する方法が考え出された。人は食べたものを分解して栄養分を吸収し、体組織を作っていく。その過程で体組織のなかにはどんなものを食べたかという記録が残る。化学分析を通してその情報を読み取ることができ、古代人が摂取した食物を推定することが可能になる。我々は、古代人の遺骨に含まれるタンパク質の炭素・窒素同位体比に注目して研究を進めている。この方法だと、同位体比に特徴のある海産物やトウモロコシの重要性を個体ごとに調べるができる。

古代パコパンパ遺跡の食性

これまでえられた結果から、古代パコパンパの人びとの食生活の時代変化がわかってきた。西暦

クイ調理済み



現在、パコパンパ村では祭りの時期や発掘隊長の誕生日にクイの丸焼きが供されるが、筆者は未だクイを食べていない。生きているクイは愛らしく、丸焼きの姿をみたくないので避けてきてしまったのだ。今年こそは挑戦しようと思うのだが、想像するだけで決心が揺らぐ。



遺跡調査と現地社会

パコパンパ遺跡の発掘調査は、遺跡の近くに位置するパコパンパ村の住民と連携しておこなわれる。

作業員の選出

毎年、発掘調査は、作業員を選出する村会議から始まる。この集会には、実際に作業員として働く男性のみならず、女性も参加し、子どもやお年寄りの姿までみられる。開始時間の午後八時には、村の集会場は多くの人で埋め尽くされる。関心が高いのは、調査がおこなわれる六月末から九月末までが農閑期にあたり、調査団から支払われる給与が貴重な現金収入となっているからである。

作業員の選出方法は、調査団と村人で話し合いを重ねて決められる。調査の質を維持するためには、熟達した経験者が望ましいが、それだと他の村人に雇用が回らない。少なくとも作業員の半数の選出は村会議に任せることにしている。毎年、数時間にわたる議論の末、貧困層への優遇、あるいはくじ引きなどで選ばれる。



発掘作業員を選出する村の集会

「誰か、推薦者はいますか？」という議長の発言を皮切りに、会場のあちらこちらで手が挙げられる。「Aさんは、皆さんもご存じの通り



出土した土器を洗浄する村人

子沢山で、家計が苦しいので、彼を推薦します。」と村人の一人が進言すれば、「そうだ、その通り。彼は作業員として働くべきだ。」との声が集会場から聞かれる。一見簡単そうに見えるが、貧しさのなかで雇われたいというエゴを出さずに、他人の境遇に配慮するのは結構難しいものだ。こうした高い自治能力は、牛泥棒対策から始まった農民自警団、水道委員会あるいは電気委員会などの社会組織が有効に機能しているからである。

女性の仕事

村の社会組織は男性に限ったものではない。農民自警団には女性委員会もあり、このメンバーに対して調査団員は衣類の洗濯を任せる。この洗濯担当の女性の選出に際しても貧困層が優先され、またなるべく多くの女性に雇用の機会を与えるために、二週間ごとに交替する。食事についても同様で、二人の女性が一週間交替で担当する。

一方で、出土した土器などの洗浄と登録の作業をおこなう女性は固定されている。分析作業の根幹にかかわる微妙な作業であるからだ。それでもときには、新規雇用のために試験をおこなない、資質を見極めたいうえで採用している。このように、集団で村に入り、しかも多大な経済的影響をおよぼす考古学調査では、

瀧上舞

たきがみ まい
C1
東京大学大学院 博士課程、日本学術振興会 特別研究員
古代アンデス社会におけるトウモロコシ利用の意義とその利用実態に興味をもっている。

紀元前一二〇〇年ころ、彼らはジャガイモやセリ科の根菜類などの植物を摂取していた。西暦紀元前一〇〇〇年ころからはトウモロコシの摂取量が増加し、その重要性が増したことがうかがえるが、主食とはならなかったようだ。しかし、炭水化物だけではタンパク質が不足するので、陸上動物も利用していたのだろう。装飾品に用いられる貝殻などは出土しているが、同位体比データからは海産物の摂取はなく、彼らが海産物を食べる機会はほとんどなかったようだ。

タンパク質源として食べていた陸上動物は、動物骨の調査からシカやラクダ科動物のリヤマ、アルパカ、そしてクイ（テンジクネズミ）などが考えられている。初めは野生の生物を捕獲していたが、徐々にリヤマ、アルパカ、クイの飼育も始まったと推定されている。

荒田恵

あらた めぐみ
総合研究大学院大学 博士課程
二〇〇七年よりパコパンパ遺跡調査に参加。おもに、出土した石器・骨角器・貝製品などの分析を担当。研究テーマは形成期の祭祀遺跡と社会との関係性。



出土した土器片一点一点に登録番号を振り、発掘区や層位の情報が復元できるようにする

文化財保護および観光開発とのかわり

黄金の墓の発見後、村では博物館を建設しようという機運が高まってきている。とくに、ペルー北海岸に位置する大都市チクラヨにあるパコパンパ村の郷土会では、観光開発を視野に入れた博物館建設のための文化財団が結成された。

観光開発は一見文化財保護と相反するよう見えるが、保存にかかる費用の捻出や、住民参加を念頭に置けば、悪い仕組みではない。今回の黄金の墓の発見でわかるように、好むと好まざるにかかわらず、開発状況に巻き込まれていくのが現代の調査とするならば、むしろ我々研究者は、観光をあらたな文化の生産、歴史認識の創造の場としてとらえ、地域社会に対して文化財の有効な活用を提言していくべきであると考えられている。



チクラヨのパコパンパ村コミュニティによる文化財団組織のパンフレット

ペットボトル以前の事

水を買う

ペットボトルはわたしたちの生活にすっかりなじみのものになってしまった。「水を買う」という事がニュースになった時代から、今やすっかり水は買うものになった。ペットボトルが普及して、大きく変わったのは水の携帯性であろう。ペットボトルが登場する以前であれば、水筒を携帯するしかなかったが、今では町のどこでも手軽にペットボトルに入った水を購入し、空き容器はどこにでも捨てられる。また飲みかけでもふたを閉めれば、カバンに入れてもち歩ける。ガラス瓶と違い軽くてゴミ箱があればどこにでも捨てられるのはペットボトル以前の飲料ではなかったことだ。

もうひとつ、ペットボトルの出現によって大きく変わったのが、ラップ飲みに対する認識であろう。テレビニュースに映るさまざまな会合や委員会を見てもペットボトルの

水やお茶で、最近のコップがない方が圧倒的だ。ペットボトルがそういう場所でも利用され始めた最初のころはガラスとペットボトルと一緒に置いてあったが、やがてガラスが紙コップになり、いつの間にか飲むための器はなくなった。

ラップ飲み

ペットボトル以前からラップ飲みはあった。しかし、ごく当たり前のことになってしまったのはペットボトルの普及によってである。瓶や缶が主流の時代でも口をつけて飲むということはあった。しかし、缶は一度開けてしまうと保存容器から飲む器に意味を変換させていた。ペットボトルではふたを閉めれば、開封後も保存容器であり続けるのだ。だからペットボトルでのラップ飲みは保存容器に口をつけて飲むラップ飲

みになってしまふ。

水を携帯するための保存容器は、以前は水筒が一般的だった。しかし、水筒には必ずコップが付いていた。駅弁と一緒に売られていたお茶のプラスチック容器もふたが茶碗になるようになっていた。ペットボトルが一般化してラップ飲



現在でもJR東海道線米原駅で販売されている、ふたが茶碗になる駅弁茶ポリ容器



ガラスびんをゴザで包んだ水筒。コロンビア

にはラップ飲みも風情があるが、部屋のなかでソファに座りながらラップ飲みは、「未だ」なじまない。

モノが支配

柳田国男は「木綿以前の事」で、日本人が木綿を手に入れた後、それ

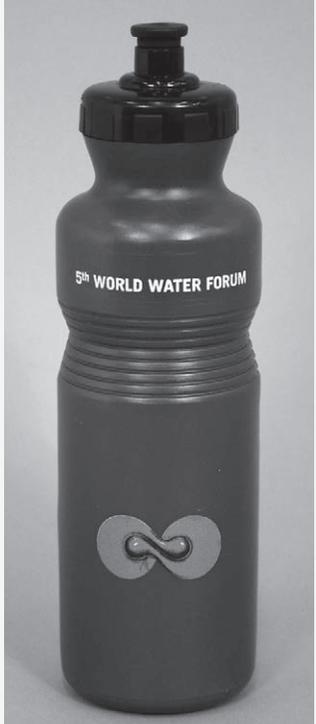
までの麻の服を着ていた時代からさまざまな生活の有り様や感覚が変わってきた事を論じたが、そのなかで「人間世界では、進歩の途が常に善に向かっていくものと安心してはいられぬ」として「モノ」が人間の生活や感覚に与える影響について論じているが、ペットボトルも利点は

かりで喜んでいられない。中高生の部活動内での新型インフルエンザ感染の原因のひとつにペットボトル飲料の回し飲みがあげられていた。単なるマナーではなく衛生上の理由で先人はラップ飲みを戒めていたのだろう。一度、口をつけたペットボトルのなかではさまざまな

細菌が繁殖を続けているという。わたしが中学生のころ、部活動が終わった後で瓶のジュースを買い、みんなで回し飲みをするとき、口をつけずに飲んでいて、口をつけずに高いところから大きく開けた口のなかにジュースを注ぎ込むのだ。ラップ飲みよりも下品で豪快な感じだが、今普通になってしまったラップ飲みよりも衛生面では気遣っていたといえるかもしれない。

人がモノを生み出しているのだが、しかしそのモノによって人は変化させられている。それを「自己家畜化」とよぶ人もいる。人間が生み出したモノは人を支配している。モノだけでなく物語（モノ）語りも人を支配しているのだが、このふたつの「モノ」と人との関係を見ることが民俗学だ。

モノや道具は使い方次第だと人はいう。いわゆる電子ゲームの是非が議論されるとき必ず出てくるのが、ゲームは道具だから使う人次第で、時間を決めてやれば問題はない、という意見だが、モノがもっている人間を支配する力を軽んじているように思う。わたしたちはモノである道具を使いこなしているつもりであるが、結局は道具に支配されているのである。



「世界水フォーラム」で配布されたもの。イスタンブールトルコ



吹田市水道部が作った高度浄水処理水「いずみの水」ボトル



ガラスびん入りボトル水「会津心水」



リラの僧院の聖水入りボトル。ブルガリア

こじま まぶみ
小島摩文

鹿児島純心女子大学 准教授

専門は民俗学、民具研究。最近モノと物語について考えている。博物館展示はまさにモノが物語に収まっている姿。



沖縄県国頭郡「恩納村博物館」

本土復帰後の観光開発を生かした地域文化の継承と発信

沖縄の本土復帰とその後の開発と密接にかかわりながら設立された地域密着型の小さな博物館。しかし、知恵と工夫で活発な活動を進めている

博物館を学び考える

民博では、JICA（国際協力機構）と協力し、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で海外から招いた博物館実務者に対する「集団研修・博物館学集中コース」を毎年開講している。三カ月におよぶ長丁場で、近隣博物館の協力もえながら、資料収集・保存管理・映像も含む記録・展示設計までを幅広く講義するとともに、研修員との経験や知識の共有をめざすもので、前身のコースも含めると、既に一七年目のコースが現在進行中だ。全体像はいずれ本誌でも紹介されるだろうが、博物館活動全体をカ



恩納村博物館正面



常設展示は民俗ゾーンと歴史・考古ゾーンに分かれている。露出展示とジオラマも多い。民俗ゾーンにある「海の恵みと生きる」コーナー

バーするコースとして例の少ないものだろう。

このコースには、特徴ある博物館を訪ねる研修旅行も含まれており、解説を受けて議論する場が設けられている。博物館の事情は百態百様だから、できるだけ多くの博物館を見ることが、博物館を学び考えるもつとも有益な方法のひとつなのだ。

沖縄開発から生まれた博物館

そうした研修旅行で訪れた地域博物館のひとつに、恩納村博物館がある。沖縄には、沖縄戦の歴史を語る数多くの博物館があるが、この恩納村博物館は、地域の歴史・文化を中心に紹介する新しい博物館。その設立経緯が、一九七二年の沖縄本土復帰とその後の沖縄開発と密接にかか



スイジガイのアクゲージ（悪風屋）村下などにつるして高懸

わっている点だが、同道したわたしには興味深かった。復帰を記念して一九七五年に開催された沖縄国際海洋博覧会は、その後のリゾート開発を促した。幸い恩納村にはサンゴ礁が多く、リゾートホテル建設が続き、村の財政は近隣に比べて豊かとなった。その後、一九八九年の竹下内閣による「ふるさと創生事業」の資金を活用して歴史民俗資料の収集が始まり、防衛庁からの資金も活用して二〇〇一年に博物館が開館した。建設資金はえたものの、運営資金は乏しいというハコモノの難点から、館長も非常勤で、臨時職員も含め職員はわずか六名しかし、外部研究者や地域住民を巻

き込むことでそのハンデをカバーし、積極的な活動を進めている。

地域との密着

住民参加や県内博物館の協力もえながら、年三回の企画展や十数回のワークショップのほか、自然を体験学習する「こども博物館」も年数回開催している。企画展やワークショップのテーマは、染色、チョウ、泡盛、海藻おしぼ、サンゴ、など、豊かな山と海の自然が中心。大きな

収入にはならないが、シーサーなどモノづくり教室への会場貸しもおこなう。また、ちょうど西側に海を望める立地を生かした「サンセットコンサート」や芸能祭は、失われかけた琉球舞踊など伝統芸能の伝承と復興もねらったものだ。地元在住のダイバーが撮りためた写真展を、海にからめて日本財団からの資金援助で開催するなど、資金と知恵のさまざまな工夫は、見習うべきところの多い、地域密着型の博物館である。



西に海を望むホール

表紙モノ語り

戦士の頭を象った壺

国名：ペルー共和国 1976年受入
標本番号：H0005790

関雄二

民博 研究戦略センター

南米の古代アンデス文明は、山岳地帯のインカが有名だが、そのインカを遡ること一五〇〇年も前に、モチエとよばれるアンデス文明史上最初の国家が興った。西暦紀元後から六〇〇年ころまで、今日のペルー北海岸で栄え、日干しレンガを積んで巨大な神殿を築いた。

建築とともにモチエで有名なのが、表紙でとりあげたような、クリーム地に赤色顔料で文様を描いた土器である。農耕、漁労、機織り、狩猟などの日常的な題材のなかにも、神話的存在が登場することもあり、古くから、写実的な図像なのか、それとも観念世界を表現しているのか、議論的となってきた。表紙写真のように頭飾りから戦士とわかる像や戦闘場面も数多い題材の

ひとつだが、実際の戦闘の証拠はほとんど見つかってこなかった。

ところが近年、モチエの中核的な神殿より、戦士にかかわる人身供犠の痕跡が発見されたのである。骨はバラバラにされ、足のスネには拷問でいたぶられた跡が残りのど仏あたりの頸骨には、放血用の切断痕が確認されている。しかも骨は、がっしりとして、骨折が治癒した跡もあった。戦闘のように常に暴力的な行為に従事していた人物、すなわち戦士の末路と考えられるのである。以前から、こうした戦闘捕虜の人身供犠をあらわした土器が報告されていたので、考古学的証拠が、戦闘や儀礼の存在を裏付けたことになる。しかし土器に描かれる戦闘場面は歩兵による集団戦ではなく、一対一で捕

かれ、また戦闘従事者の衣装や武器が似ている点からすれば、エリート同士の戦闘であったと考えたほうがよさそうだ。人物象形土器は、これら戦士の肖像なのである。さらに同一人物の肖像でも、立派な戦士に成長し、やがて捕虜となり、裸

体に縄を打たれる最後の姿までを一連の土器で表現した例もある。モチエの武士道とは何か。おもしろい研究テーマかもしれない。



企画展

「水の器―手のひらから地球まで」

生命の根源、水。民博所蔵の様々な器やペットボトルから地球規模まで、器を通して人と水の問題を幅広く考えます。
会期 六月二日(火)まで
会場 本館展示内

を書いてメールまたはFAXにて左記「ワークシヨップ(水の器係)」までお申し込みください。お申し込み多数の場合は抽選となります。
※対象は小学校高学年からです。
申し込み締め切り
五月二日(水)
E-mail:workshop@idc.nipak.ac.jp
FAX:06687877533

「伊勢の染型紙―映像と実物にみる匠の技―」

江戸時代に流行した小紋染めには、おもに伊勢で作られた伊勢型紙が使われていました。映像資料とともに型紙を展示し、伝統の技を紹介します。
会期 六月二日(火)まで
会場 本館展示内
※研究者によるギャラリートークをおこないます。
実施日 五月八日(火)
時間 一四時三〇分～一五時三〇分

時間 一三時三〇分～一六時(開場二時)
会場 講堂
定員 四五〇名(先着順)
参加費 無料
※当日一〇時より会場入口にて整理券配布。
●みんぱく映画会
民族学者とヒマラヤ、南極

●一日館長

五月九日(日)に、本館イメージキャラクターである宝塚歌劇団雪組 早霧せいなさんを一館長としてお迎えし、展示場の見学や握手会などの行事を予定しています。



*詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

●みんぱくワールドシネマ「シリアの花嫁」

実施日 五月二日(土)

◆「南極大陸」
実施日 六月五日(土)
時間 一三時三〇分～一六時四〇分(開場一三時)
会場 講堂
定員 四五〇名(当日先着順)
参加費 無料
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話 〇六六八七八八二二〇
(平日九時～一七時)

刊行物紹介

■竹沢尚一郎 著
『社会とは何か システムからプロセスへ』
中央公論新社 定価：798円(税込)



社会の語はいつてきたのか。それが「フランス社会」のような全体社会を意味するようになったのは17世紀のことだ。その後、社会の語はどのように変化したのか。社会的な連帯を築くには、社会の何を変えなくてはならないのか。水俣や移民の問題を通じて、それらの問題を考える。

■陳天璽 編
『忘れられた人々 日本の「無国籍」者』
明石書店 定価：1,890円(税込)



「国籍」とは何なのか。世界から見過ごされてきた「無国籍」者。国々のはざまに置き去りにされ、正確な人数や生活も明らかになっていない。当事者が語る日本の「無国籍」の姿。

■Edited by Maki Mita
『Palauan Children under Japanese Rule: Their Oral Histories』
(国立民族学博物館調査報告No.87)

■O. A. Шагланова Юки Коногая
『Аннотированный каталог архивных материалов по бурятскому шаманизму: Центра Восточных Рукописей и Ксилографов Института Монголоведения, Буддологии и Тибетологии』
(国立民族学博物館調査報告No.88)

■土方久功著 須藤健一・清水久夫編
『土方久功日記 I』
(国立民族学博物館調査報告No.89)

みんぱくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13:30~15:00(13:00開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第384回 五月十五日(土)
[新言語展示関連]
世界のことは一語順と系統
講師 長野 泰彦(民族文化研究部教授)

新しい言語展示では、3000とも4000とも言われる世界の言語の多様性を示すとともに、語順等に観察される普遍性を浮き彫りにします。また、諸言語の歴史関係を大胆に鳥瞰できる図も作成しました。これらをどのように利用していただけるか、日本語は世界の言語の中でどういった位置づけになるのかにも触れます。



第385回 六月十九日(土)
北タイの精霊ダンス
講師 田辺繁治(民博名誉教授)・平井京之介(民族文化研究部准教授)

北タイでは、精霊が主として女性の身体に憑依してダンスを演じる祭祀が現在もおこなわれています。そのパフォーマンスの華やかで躍動的な美しさと、人びとを癒しや解放へ導く不思議な魅力についてご紹介します。



友の会

友の会講演会(大阪)
会場●国立民族学博物館
第5セミナー室
定員●96名(当日先着順、会員証提示)

第384回 六月五日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
文明の融合都市、
イスタンブールのゆくえ
講師 新免光比呂(民族文化研究部准教授)
ボスボラス海峡をはさんで、アジアとヨーロッパにまたがるイスタンブール。東ローマ、オスマン帝国の首都として、ふるくから多くの民族が行きかう十字路であり、また東西交易の中心都市でもありました。トルコのEU加盟は苦戦する一方、今年、欧州文化首都に認定されたイスタンブールは、かつてのように東西の文明を融合させる都市となりうるのでしょうか。

第385回 七月三日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
日本に暮らす外国人の今
―特別展「多みんぞくニホン」その後
講師 庄司博史(民族社会研究部教授)

第385回 七月三日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)

第385回 七月三日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
日本に暮らす外国人の今
―特別展「多みんぞくニホン」その後
講師 庄司博史(民族社会研究部教授)

東京講演会
会場●JICA地球ひろば
セミナールーム301
定員●60名(要申込、下記まで)

第93回 五月二二日(土)
時間●14:00~15:30(13:30開場)
東北アジアのシルクロード
―人びとをつなぐ河の道
講師 佐々木史郎(民族社会研究部教授)

第76回 民族学研修の旅
シベリアの森を歩く
少数民族ナーナイの村を訪ねて
旅行期間●7月26日(月)~30日(金)
旅行代金●298,000円(燃油代等別途)
詳細は下記までお尋ねください。

国立民族学博物館友の会
電話 06-6877-8893
ファックス 06-6878-3716
電話でのお問い合わせは
月曜~金曜日9時から17時までお願いします。
http://www.senri-f.or.jp/
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

オンラインショップ「World Wide Bazaar」をご存じですか。

ミュージアム・ショップのサイト「World Wide Bazaar」をご利用いただければ、遠方にお住まいの方も、手軽にみんぱくでのお買い物を楽しんでいただけます。世界各地の民族楽器や民族音楽のCD、工芸品や雑貨の他、過去に開催した特別展の解説書などみんぱくの刊行物を中心に、民族学・文化人類学関連の

書籍を、多数取りそろえております。みんぱくミュージアム・ショップをより身近な存在に。皆さまのご利用をお待ちしております。
*「国立民族学博物館友の会」会員の方は、店頭と同じく会員価格で購入いただけます。



オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ
電話 06-6876-3112
ファックス 06-6876-0875
水曜日定休
E-mail shop@senri-f.or.jp

フィールドノートを読む——みんなくでの三年

手元にはたくさんさんのフィールドノートが残された。そのすべてがいわゆる大学ノートである。これらは観察に用いた手帳型ノートの記録を書き写し整理したもので、聞きもしや不用意な誤解などを見つけたためにつくられた。それはわたしがフィールドで続けてきた夜の作業の成果である。

「加工屋さん」のころ

これらのフィールドノートがもたらした仮説のひとつが、日本列島主要部における堅果類のアク抜き技術の分布圏である。東北日本のナラ林帯ではナラ類のドングリヤトチノミを加熱によってアク抜きする。一方カシ類のドングリを食用にしてきた西南日本では、水にさらしてアクを抜く。この記録をもとに堅果類の食用技術には東北日本の加熱処理技術圏と、西南日本の水さらし技術圏が設定できると考えた。

このころのわたしは、堅果類をはじめ根茎や鱗茎など、野生植物の食用化の技術に関心をよせていた。そのためみんなくでは「加工屋さん」



屋根に雪岳ドングリ食品工場とある。韓国

とあだなされていた。みんなくからアメリカに留学していた吉田集而さんの車に同乗してカリフォルニア州ヨセミテ国立公園に先住民ミウオクのドングリ食用の技術を訪ね、今も食品として流通するドングリ食品を韓国で調査したのも、一九七〇年代末から八〇年代初めのことだった。

コンピューターと『斐太後風土記』

そんなときみんなくでは「コンピューター民族学」の構築がすすめてられていた。小山修三さん（現名譽

教授）とともにこのとき取りあげたのが、明治初めに編纂された『斐太後風土記』であった。これにはそれぞれの村ごとに人口、田畑の面積、米および雑穀の収量、野菜の種類と収量、クリやドングリといった堅果類とクズやワラビなどの収量が克明にしるされている。それをコンピューターに入力して分析した。このプロジェクトには杉田繁治さん（現名譽教授）や秋道智彌さん（現総合地球環境学研究所教授）も加わっていた。ここから明らかになったことのひとつが、当時の飛騨では主要な食料に利用された栽培作物と野生植物に明確な地域差のあることだった。高山盆地では米が酒にさえつくられたのに対し、盆地周辺の諸村では雑穀の比重が増し、さらに外縁の山間部ではドングリやトチノミ、クズやワラビがおおきな比重をもっていたのである。それは歴史が空間に投影されていることを示していた。

谷口国際シンポジウム

「変容する狩猟採集民」

これら日本の山村研究とともに、

現代の狩猟採集民に関する推奨文献に指定された。わたしのひそかな誇りである。

その後のアボリジナル研究は一〇〇万都市アデレードのアボリジナル・コミュニティを経て、白人人口の多いニューサウスウェールズ州の地方町へと問題の領域を広げていった。そんな各地での調査から見えてきたのは、植民地を生きぬいたアボリジナルの歴史であった。

わたしのフィールド・ノートは、いくつかの著作をもたらし、それは同時に、みんなくでの三三年におよぶわたしの研究日誌ともなったのである。



トヨタ製のトラックによる狩り。オーストラリア大陸北部のアーネムランドで

アーネムランド・アボリジナルランドの境界標。オーストラリア大陸北部のアーネムランドは、1980年代初めにアボリジナルに返還された



八〇年代なかごろから本格的に取り組んだのが、オーストラリア・アボリジナル研究である。このころのオーストラリア人類学会では、アボリジナル研究が盛んであった。北部準州などでの「アボリジナル土地権法」の施行によって、土地権保有者の確定などに人類学の知識を必要としたからである。そんななかでわたしの調査を助けたのは、「博物館みんなく」の職員であることだった。絵画や彫刻を制作してもらってそのプロセスを記録し、作品を標本資料としてみんなくが購入するという切り札が、フィールドへの定着に大きく貢献してくれた。こうして始まった調査のなかで、狩猟採集



わたしのオーストラリア最初のフィールド、ユーカリに囲まれたアーネムランドのむら



チャーター機でアボリジナルのむらから都市の親族を訪ねる姉と弟



韓国の観光地、雪岳山での記念撮影

まつやまとしお
松山利夫
民博 民族文化研究部
立命館大学大学院文学研究科地理学専攻博士課程単位修得後退学。文学博士。1976年民博着任。民族社会研究部部長、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長などを歴任。専門は文化人類学、オーストラリア先住民研究。著書に『ブラックフェラウェイ・オーストラリア先住民アボリジナルの選択』（御茶の水書房）、『精霊たちのメッセーger』現代アボリジニの神話世界（角川書店）、『ユーカリの森に生きる—アボリジニの生活と神話から（日本放送出版協会）』など。



ほかに、大学生のお姉さんから高校生たちに「結婚相手はなにがいいですか」というドッキリとする質問があった。照れながら「好きだったら、なに人でもいいです」と答えた生徒がほとんどだった。大学生たちは、中華学院の生徒たちが民族や国籍にあまりこだわりのないことに意外性を感じ

多文化共生はあたり前

すっかり和やかな雰囲気になったころ、すでに二時間が経過していた。最後に感想を述べ合うと、大学生の一人が、「こうして直接みんなと話を

最近になって多文化共生が謳われているが、中華学院の生徒たちにとってみればあたり前のこと。華僑・華人として日本に生まれてきたのだから、生まれながらに課されたタスクでもある。その種をいかに育て文化や民族の橋渡しし



運動場での体育の風景。欧米系の生徒もいる。奥には孫文の銅像もく提供・庄司博史>

将来のイメージ

両親から生まれた生徒たちからは、「親が中華学院の卒業生だから」とか、「母語である中国語を身につけるため」という理由があった。一方、来日して間もない生徒たちは「日本の学校に入りたくないけど、日本語では勉強についていけないという不安があったから」という。両親とも日本人の生徒は、「こじんまりしていて家族的なのが決め手だった」という。

「自分が親になって子どもができたとき、どんな学校に通わせたいか」という質問もあった。高校生たちにとっては、少々気の早い話に思えたが、みんな一生懸命将来をイメージしながら答えていた。「子どもと相談して決める」という生徒もいれば、「できれば中華学院に通わせたい」という子もいた。「中華学院の今後の教育方針を見て決める」という冷静な発言をする生徒もいた。通わせたい理由として、中華学院の先生と生徒たちの関係が親密で家庭的だからという。一方、躊躇を示した学生は、近年生徒が急増し、かつてのアットホームな雰囲気にかげりが見えてくることに難色を示した。



中華街のパレードで民族舞踊を披露する生徒たち

とじていた。 「自分が親になって子どもができたとき、どんな学校に通わせたいか」という質問もあった。高校生たちにとっては、少々気の早い話に思えたが、みんな一生懸命将来をイメージしながら答えていた。「子どもと相談して決める」という生徒もいれば、「できれば中華学院に通わせたい」という子もいた。「中華学院の今後の教育方針を見て決める」という冷静な発言をする生徒もいた。通わせたい理由として、中華学院の先生と生徒たちの関係が親密で家庭的だからという。一方、躊躇を示した学生は、近年生徒が急増し、かつてのアットホームな雰囲気にかげりが見えてくることに難色を示した。



中華学校への入学希望者の増加 (産経新聞2005年1月11日版)

中華学校を選んだ理由

先日、某国立大学の学生さんからメールを頂戴した。日本で生活

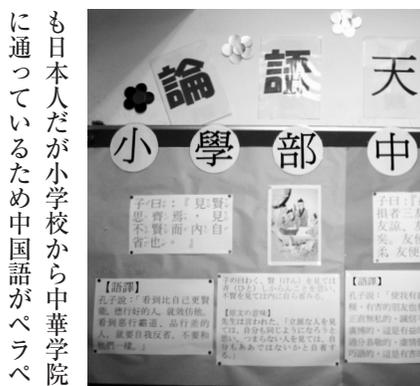
している外国人の子どもたちを通して多文化共生を考える授業を受けているとのこと、学年末に課されたグループワークのテーマに中華学校を選んだそうだ。「自分たちと年齢の近い横浜中華学院の高校生と議論をしたいので、同席してください」というのだ。

も日本人だが小学校から中華学院に通っているため中国語がペラペラな生徒など、中華学院の生徒たちのバックグラウンドはじつに多様であることがうかがえた。対話は日本語でおこなわれ、日本語の理解に苦しむ生徒には近くに座っていた同級生が通訳をしていた。

日本には、中華学校や華僑学校とよばれる中国系の子どもたちのための教育機関がある。東京、横浜、大阪、神戸などに合計五校ある。もっとも古いものでは一〇〇年以上の歴史を有し、孫文が革命活動のため来日していた際に創設にかかわったという学校もある。中華学校は、大陸系(中華人民

共和国系)と台湾系(中華民国系)の違いから、生徒が学ぶ歴史や文字など、いくらか差異はあるものの、いずれも日本に暮らす華僑・華人の子どもたちへの母語教育、伝統文化にそった道徳教育、民族の自覚、日本と母国の友好親善事業に積極的に貢献できる人材の育成を教育目標に掲げている。

大学側からは学生が五人、そして付き添いの先生が一人いらしていた。横浜中華学院側も、学生たちの交流を貴重な教育、啓発の機会と考えたのか、授業時間を割き大学生の依頼に対応していた。中華学院側からは高校一年生から三年生の生徒が十五人ほど参加した。二〇人ほどで輪をつくり、まずは自己紹介から始めた。日本生まれの中国系四世で中国語よりも日本語の方が流暢だという生徒もいれば、両親が国際結婚している生徒、来日してまだ一、二年なので日本語がうまく話せない生徒、両親と



学内に貼られた、バイリンガルで書かれた論語の標示。台湾系のため漢字は繁体字で学んでいる

Table with 2 columns: '多文化を' and 'ささえる' / '人びと'

対話から理解へ

大学生たちとの横浜中華学院訪問記

日本に暮らす中国系の子どもたちのための教育機関、中華学校。ここで学ぶ生徒たちにとって、多文化共生はあたり前のことだ。日本の大学生と横浜中華学院の子どもたちの交流を通して、相互理解における対話の大切さを考える

陳天璽 (チエン ティエンシ) 民博 先端人類科学研究部 華僑華人研究をはじめ、移民・マイノリティ研究、国籍パスポート研究に取り組んでいる。人びとの移動にともなう文化の移動と変容。そして、個人と国家の関係に興味をもっている。

ブラジルの国民的な飲み物 (ガラナ)

ブラジルの清涼飲料水といえばガラナの右に出るものはない。色は薄茶で、甘い味だ。ガラナ・アンタルチカはビンの形状がコカ・コーラに似ているが、コカ・コーラをはるかにしのぐ人気をほこっている。年間販売量は8億リットルといわれ、ガラナ市場のシェアは約30パーセントである。ガラナはブラジルの国民的な飲み物といっても過言ではない

アマゾン先住民の飲料

ガラナはもともと植物名称であり、トゥピ語系のことばに由来する。故郷と目されるのはアマゾン川中流域であり、先住のサテレ・マウエ人が愛飲してきたことで知られている。その中心地であるマウエス市にはガラナ・アンタルチカの工場もある。ガラナの実からいわゆるガラナ・パンやガラナ・スティックがつくられる。種子を乾燥させて白でつき、半年くらい乾燥させてパン状にしたものがガラナ・パン。丸い棒状に固めたのがガラナ・スティック。その

サルやイヌ、ブタ、そして最後に人間の先祖が生まれた、というような筋である。

サテレ・マウエ人はガラナの効用を独占的に享受するだけでなく、他の民族との交易にも使用していた。その範囲も遠くマトグロッソ州やボリビアにまでおよんでいた。

日本にもあるガラナ・ドリンク

日本では滋養強壮剤の原料としてガラナエキスが使われることもあれ



ガラナの実。熟すと殻が赤くなる



なかまき ひろちか
中牧弘允
民博 民族文化研究部
専攻は宗教学人類学、経営人類学、ブラジル・アマゾンの日系人社会や先住民社会の研究をおこなう。サイケデリックス(精神拡張剤)の調査にも従事したことがある。

棒をピラルクという巨大な淡水魚の舌でこすった粉末がガラナ・パウダーである。サテレ・マウエ人のあいだでは、家庭でも日常的につくられ、集会のときなどには、粉末を水で溶き大きなヒョウタンの器に入れて回し飲みをする。わたしも一度、そうした集会で飲んだ経験がある。味は淡白だが、多少苦みと渋みがある。アルカロイドとしての鎮静作用があり、集会では興奮を抑制する効能がえがたいのであろう。ちなみに、一七世紀にサテレ・マウエ人に宣教をこころみたいエズス会士は「寒さに対処するには砂糖が必要だが、暑さに対抗するにはガラナが一番だ」としている。炎天下の旅には必需品でもあったようだ。また空腹を感じさせない作用があり、頭痛、発熱や下痢などの症状にも効



日本で販売されているガラナ・ドリンクのサンプル

ば、炭酸飲料水のガラナ・ドリンクも各種製造されている。

ガラナ・ドリンクはなぜか北海道でかなり販売されている。小原のコーアップガラナをはじめガラナエール、北海道ガラナ、キリンガラナ、ガラナスカッシュ等々。熊出没注意コーアップガラナという製品まである。一説によると、コカ・コーラの日本解禁に対抗してガラナの製造を全国的にはじめたところ、他地方とくらべ北海道へのコカ・コーラの進出が遅れたため、ガラナの味が北海道に定着したのだそうだ。北海道ではビールにガラナを入れた時期もあったらしい。

在目撃者によると、ガラナは必需品であり、缶のガラナ・アンタルチカが主力商品となっている。驚いたことには、炭酸飲料だけでなく、耐ハイのガラナも全国的にまわっている。ガラナは日本でも意外と健闘しているのだ。

くという。

サテレ・マウエ人のあいだでは、ガラナの起源神話が次のように伝えられている。むかしむかし、二人の兄と末の妹が暮らしていて、妹はパラ栗を育てる農園を管理し、薬草から薬を調合する役目を負っていたが、ある日、蛇が彼女を妻にしたいと思いい、股間に侵入してしまった。すると彼女は妊娠して男の子を生んだ。その男の子のために彼女はパラ栗を植えた。その栗は大人になってからでないと食べてはいけないから、男の子はタバコを破ってパラ栗を食べてしまう。それが見つかり、見張り番の動物たちに殺されて、墓に埋められる。その死体の左の目からは偽りのガラナ、つまり実のならないものができ、右目からは本物のガラナが生えた。その後この墓からは、

戦前のガラナ

かつてマウエス市には、日本人が入植した時代がある。一九二八年には大石小作という人がガラナ栽培の夢を抱き、アマゾン興業株式会社を設立、自身も一九二九年、六名の移住者とともに入植した。このグループはかなり奥地まで入ってガラナを植えたが、ずさんな経営でガラナ事業は挫折する。その後、東京で食品学校をひらいていた崎山比佐衛という人物が、その分校をアマゾンにつくるといって、親戚を引き連れて入植した。そして、四万五〇〇〇本のガラナ園の経営に力を尽くしたが、彼もマリアにやられて失敗する。崎山一族の末裔は今でもマウエス市に住んでいるが、ガラナの栽培からは手を引いている。国内でガラナが登場したのは一九二七年である。上野松坂屋でガラナの宣伝飲料会が開かれている。戦前森下仁丹や大正製薬はガラナ飲料を販売していたし、山梨醸造はガラナ酒を製造していた。戦前のガラナ製品はアマゾン入植者たちの夢とどこかでつながっていたのだらう。



ガラナ・アンタルチカ
手前の料理はフェイスジョアード

ブラジル製粉末ガラナ製品のサンプル



ガラナ・スティックと淡水魚ピラルクの舌。ざらざらした舌でこすって粉末にする

ガラナ

Paulinia cupana
アマゾン原産のムクロジ科のつる性植物で赤い実をつける。コーヒー豆とおなじくらいの大きさであるが、コーヒーの3倍から5倍くらいのカフェインが含まれている。タンニンの含有量も非常に多く、下痢や消化器系の症状によく効くという。またサポニンは疲労症候群に効能があり、カテキンは偏頭痛や神経症に効果があるとされる。最近では体重の減量や認知症にも効くという宣伝がめだつ。



歳時 世相篇 26

映画にみる台湾の多様性

台湾で一昨年、大ヒットした映画『海角七号』が今年のはじめに日本でも公開されて話題を呼んだ。第二次世界大戦終了直後に台湾から日本へ引き揚げた日本人青年が台湾に残した恋人にあてた手紙が戦後、数十年を経て届けられることから話がはじまる。邦題のサブタイトルに「君想う、国境の南」とつけられたこの映画は、「ときをこえた日本と台湾の恋愛物語」、「台湾と日本との絆の物語」と日本での評判も悪くない。が、筆者はこの映画をそんな視点ではあまりとらえないでいた。この映画は、台湾における多民族の状況を非常に素直に描き、かつて日本人がいろいろなことを台湾に「押しつけた」ことをユーモアと皮肉をもって伝えていると思うのである。それ

大甲媽祖遶境進香 夏の到来をつげる 台湾の媽祖巡行



海運や漁業の安全をつかさどる海の神、媽祖。その誕生日とされる旧暦の3月23日には、各地の天后宮で祭典が催され、集まった人びとは媽祖をかついで夜通し練り歩く。この行列が終わると、台湾は本格的に夏の季節を迎える

を如実にあらわしたのが映画後半の次の一場面であった。

舞台は台湾の南端にほど近い町。日本人歌手がおこなうフーテンコンサートの前座に、地元の子供たちが出演することになった。このメンバーがなかなか個性的なのである。都会で夢破れて故郷にもどり郵便配達をしている本省人青年、地元で警察官をしている酒が強いパイワン族青年、

日本語世代の本省人のおじいさん、原住民族のお酒を商品化して売り込む客家人男性といった具合に、台湾社会の現状や民族のモザイク状況の縮図ともいえる構成になっていた。そこに、バンドを人前に出せるまでに仕上げるために、日本人の若い女性モデル（どうも売れないらしい）がマネージャーとしてはりつけられる。彼女、台湾の文化や社会にかなり疎い。いよいよ本番を目前に控え

海の神、媽祖

ところで、本省人のおじいさんが、お守りとして首にぶら下げていた媽祖は、古くから台湾の人びとに信仰

されてきた道教の神さまのひとつである。海運や漁業の安全をつかさどる海の神であり、台湾だけでなく、福建省や広東省でも根強い信仰が見られる。古来、山の神は女性がつきものであるが、海の神が女性というのはあまり聞かない。媽祖は女神で、宋代に実在した林姓の女性にその由来を求めることができる。千里眼と順風耳というふたつの神さまをしたがえ、先を見通し、荒ぶる海のなか人びとを導いていくことから、海に囲まれた台湾ではとりわけ愛着をもたれている神さまといつてよいであろう。福建から台湾へ渡った移民の人びとや世界に飛び出した華僑の人びとが媽祖を尊ぶという気持ちはよく理解できる。

天后宮での祭典

台湾の各地にはこの媽祖を祀った廟が建てられている。媽祖は天后や天上聖母とよばれ、祀られている天后宮や廟はいつもその信者でにぎわっている。また、その誕生日とされる旧暦の三月二十三日には各地の天后宮で祭典が年中行事として催される。そのなかでも最大なのが、媽祖の総本山のひとつとされている台中県の大甲にある鎮瀾宮 (<http://www.dajiamazu.org.tw/>) の媽祖像が、毎年四月の後半から五月にかけて嘉義

野林厚志

のばやしあつし
民博 研究戦略センター

人間と動物との関係を歴史的、社会的に考える研究と、台湾原住民族の社会や歴史を物質文化を手がかりに考える研究との二足のわらじをはいている。

て、バンドがなかばあきらめムードで練習を放り出しかけているときに、この女性マネージャーは練習場にやってきて、バンドのメンバーにパイワン族のトンボ玉の首飾りをお守りだといって渡していく。パイワン族青年は脈絡のないトンボ玉を日本人に渡され不愉快になり、おじいさんは、自分もともと信仰している媽祖の神さまのお守り袋をさすりながら、神さま同士が喧嘩しないかなと困惑しながらも、バンドのメンバーを思う女性の気持ちにこたえ、トンボ玉を受けとるのであった。相手のことがよくわからない日本人が台湾人や原住民族の人たちによかれと思っただけのことに対して、なかばあきれながらも寛容に接してきてくれた台湾の人びとの懐の深さを筆者は感じたのだった。

県の新港にある奉天宮まで運びこまれ、再び戻ってくるという巡行（遶境）である。二〇一〇年は四月二十六日の夜二時に大甲を出発し、一九日に新港に到着。二〇日にお祝いをした後、再び出発し四月二十五日に大甲に帰着するというスケジュールが組まれている。旧暦で変動するスケジュールに合わせて、毎年、台湾中から媽祖の信仰心に篤い人びとが集まり、媽祖をかついで夜通し練り歩き香を献ずる（進香）のである。この時期のテレビのニュースには連日その様子が映しだされる。この行列が終わると、台湾は本格的に夏の季節を迎える。

現在、台湾の首都台北の天后宮は日本時代の寺院の建物を利用した小さな建物である。日本が統治する以前、台北の天后宮は現在の總統府の近くに建てられていた。度重なる台風や水害のため、かなり傷んでいた天后宮は修理されることなく撤去された。その後には、「科学的」な知を伝えるための博物館が一〇〇五年に建設された。現在の国立台湾博物館の前身となる台湾総督府博物館である。信仰のよりどころであった天后宮のかわりに建てられた知の装置を台湾の人びとは受け入れた。そして、それは今でも当時の面影を残し、人びとが集う場所となっている。寛容の文化と歴史が台湾にあることを教えてくれる気がする。

海の恵みは皆で分ける

二〇〇八年夏、わたしは数名の調査仲間たちとサモア北方の沖合を帆船で漂っていた。我々が目指すのはサモアの北方約三〇〇キロメートルに位置するトケラウの環礁島。この環礁群で数年間にわたって考古学および人類学的調査をおこなうことが、我々の目的であり、この渡航が最初のトケラウ航海でもあった

海拔わずか 数メートルの島々

トケラウはポリネシアにある環礁島だ。これまで同じオーストロネシア語圏の東南アジアの島々でフィールド調査をしてきたが、南太平洋の東の果てに広がるポリネシアはオーストロネシア語圏の最辺境というイメージがあった。

またトケラウは、ニュージールランド領に属しており、島の人びとはニュージールランド人でもある。実際、合計約二万人とされるトケラウ出身者のうち、現在、島で暮らしているのはわずかに一五〇〇人。残りの人びとの多くは、ニュージールランド本土やオーストラリアに居住している。

トケラウは、合計で三つの環礁島から成り立っている。環礁島は、次のようなプロセスを経て海面にあらわれる。まず、もともとあった島が海面下に沈降すると、その周辺に生

息していたサンゴ礁が太陽の光をとめ、海面に向かって隆起する。その後、急激な海面変動や地殻変動が生じると、海面すれすれまで発達していたサンゴ礁が海面より高くなつて島になる。いつぼう、もともとあった島は海面下にあるため、ちょうどドーナツ状にサンゴの島が分布し、中心の穴の部分が比較的浅い海（ラグーン）になる。

環礁島のもうひとつの特徴は海拔わずか数メートルという島の低さである。このため環礁島は、昨今の地球温暖化やそれによる海面上昇の影響をもっとも受けやすい島でもある。このことではツバル環礁が有名だが、トケラウはそのツバルに近く、海面上昇に対する危険度だけでなく、言語や文化もツバルに似ている。

アタフ環礁の集団漁

サモアを出港して海を漂うこと三

日、彼方に平べったい緑の島影が見えてきた。アタフ環礁だ。アタフはトケラウのなかでももっとも北に位置し、我々の調査もこの島から開始することになっていた。島数は四一と多いが、人びとが住んでいる島はひとつだけ。残りの島はいずれもココヤシ林が繁るのみである。

島の人びとによれば、かつてはこ

体を目見れば、彼らの自信のほどにも納得だ。いっぽう子どもや女性も、島のラグーンや沿岸のリーフ域でさまざまな漁に参加する。

わたしも、暇さえあればそんな彼らの漁に参加させてもらった。そのなかでも興味深かったのが、リーフでおこなう集団漁だった。島の人びとによれば、この漁は年に数えるくらいしかおこなわないという。なぜならリーフに生息している魚を一網

打尽にする漁なので、頻繁におこなうと魚がいなくなってしまうからだという。

一体どんな漁なのか。集団漁がおこなわれる当日、ワクワクして浜に出てみるとすでに男や子どもたちが集まっていた。やがてその数が一〇〇名を超えたころ、おもむろに漁は始まった。といつても大半の人びとが手にしているのはココヤシの葉だけ。刺し網をもつ男たちもわずかにいる。これで魚を追いつまみ、網で漁獲するという。半信半疑で覗いてみると、



水揚げ風景



ココヤシの葉をもつてのリーフ漁

日目の朝、彼方に平べったい緑の島影が見えてきた。アタフ環礁だ。アタフはトケラウのなかでももっとも北に位置し、我々の調査もこの島から開始することになっていた。島数は四一と多いが、人びとが住んでいる島はひとつだけ。残りの島はいずれもココヤシ林が繁るのみである。島の人びとによれば、かつてはこ



魚を獲る人と解体する人たち

一時間もしないうちに千匹以上(約六〇〇キログラム)のブダイやニザダイといったリーフの魚が水揚げされた。

イナティで分ける

魚が水揚げされるや、早々と魚の内臓を取り出す人びとが出てきた。良く見ると、取り出した内臓を美味そうに食べている。「新鮮な魚の内臓ほど美味しいものはない」と老人たちもご満悦だ。こうしてきれいに内臓を取られた魚は、島のメンスハウスへと運ばれ、そこで村中に平等に分配される。

この共同分配制を「イナティ」という。伝統的にイナティで分配され

のココヤシが人びとの貴重な食料源だったそうである。面積も狭く、海拔も低い環礁島で育つ植物はきわめて限られている。トケラウの場合はココヤシとパンダナス(タコの木)の実のみであったが、一七世紀以降はパンの木や湿地タロイモが加わり、近年ではコメをはじめ多くの食料を輸入に頼っている。

イナティで分けられた魚たちとリーフ



イナティで分けられた魚を取りにくる子どもたち

てきたのは、ウミガメやカジキといった貴重な海産物だが、今回のように集団漁で獲れた魚もイナティによって平等に分配されるという。嬉しいことに見学していたわたしにまで同じ数の魚を分けてくれた。トケラウで生まれたイナティとは、資源に乏しい環礁島ゆえの知恵の結晶だろう。ただ驚きだったのは、このような伝統的な知恵と制度が、外から輸入されるモノや食糧に溢れた今でも脈々と続いていることだった。そんな感動を胸に、手にした魚とともにわたしは居候先のお宅へと帰路についた。次はどんなイナティに立ち会えるだろうか。気がつけば、トケラウはすでに辺境の地ではなく、身近な存在になっていた。

おの りんたろう
小野 林太郎
東海大学 専任講師

専門は海洋考古学、東南アジア・オセアニア地域研究。先史遺跡から出土する魚骨や漁具の分析、現代の漁撈や海上交易など、人類による海の利用とその歴史に関心がある。

編集後記

本号特集を監修した関教授のことを、わたしは勝手に「みんなのインディアナ・ジョーンズ」とよんでいる。ペルーの山奥で月明りのもとで発掘をする姿を想像すると、考古学アクション映画のヒーローを思い浮かべる。廊下ですれ違ふと、わたしの頭のなかで映画のテーマ音楽が鳴り始めてしまう。

しかし、映画のインディアナは、ペルーのジャングル奥の神殿からは黄金の神像をもち逃げする。エジプトの市場のど真んなかでは大きなムチをふるう。あげくに、「発掘」してきた至宝が、結局「お蔵入り」になってもハッピーエンド。よく考えると、遺跡のある地域のんびとやさしくない考古学者である。映画を批難するつもりはないが、関発掘隊の実態を聞くと、遺跡の地元への細やかな気遣いにつづく感心する。村の自治に参加し、発掘が生み出す収入が必要なところに分配されるように配慮したり、村祭りに豪華な仕掛け花火を寄付したり、現地の政府や大学とかけあって、遺跡と遺物の保存と観光資源化に頭を悩ませたり……。そこには痛快娯楽映画のヒーローとは違う「かっこよさ」が漂う。(山中由里子)

次号の予告

特集

ペットボトルの世界

月刊みんなく
2010年5月号

第34巻第5号通巻第392号 2010年5月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫
編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史
中牧弘允 信田敏宏 山中由里子
制作・協力 財団法人 千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

●予定時間 14時30分から15時30分(予定)。

●本館展示観覧料が必要です。

*都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんなく)の研究者が来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別!
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

5月の開催

5月2日(日)

話者: 久保正敏(文化資源研究センター教授)

話題: 水の器から水の問題を考える

場所: 企画展「水の器」会場

5月16日(日)

話者: 八杉佳穂(民族文化研究部教授)

話題: 言語と文字

場所: 言語展示

5月23日(日)

話者: 庄司博史(民族社会研究部教授)

話題: 言語展示の楽しみ方

場所: 言語展示

5月30日(日)

話者: ピーター J. マシウス(民族社会研究部准教授)

話題: 民族植物学の旅

場所: 本館展示入口



日本語と同じ語順のことばにはどんなことばがあるのかな。(新言語展示)

1年間みんなくに何度でも入館できる

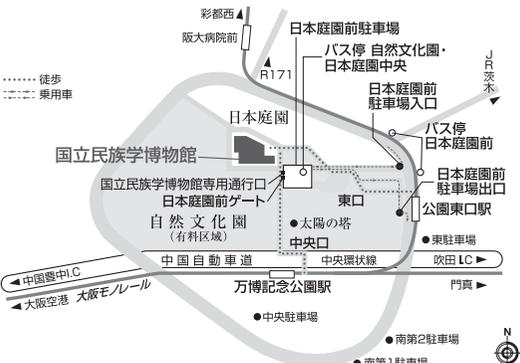
「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

常設展は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆常設展の無料入館◆特別展の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00~17:00)



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れられます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

